



No.818 ヘビの小腸

麻布大学

【動物】ヘビ, ボア *Boa constrictor*, 雌, 推定2歳(体長1m弱), アメリカからの輸入繁殖個体.

【臨床事項】食欲廃絶と腹部の限局性腫脹により上診. 来院時, 体幹中央部分に小鶏卵大の腫瘤が存在したため, 摘出手術を実施した. 腫瘤は肝臓後方に位置し, 消化管を圧迫, 大動脈を巻き込むように存在していた. 摘出された腫瘤およびその周囲組織がホルマリン固定材料として当教室に送付された.

【肉眼所見】腫瘤は直径約3cm, 非常に脆弱で, 表面に胆汁着染が認められた. 腫瘤と同様の色彩と質感を有する小結節数個と小腸が癒着し, 一塊となっていた.

【組織所見】小腸上皮細胞に1~10 μ の大小様々の好酸性細胞質内封入体が見られた. 封入体をもつ細胞には, 変化のないものから高度の風船様変性や核の変形や濃縮がみられるものまで様々あった(図1, 2). 封入体は主として腸上皮細胞に観察されたが, 平滑筋細胞, 血管内皮細胞やリンパ球にも認められた. 小腸漿膜面には細菌塊と線維素の析出, 偽好酸球の浸潤, 肉芽組織の反応を伴う腹膜炎が観察された. 摘出された腫瘤の組織所見: 腫瘤は顕著な偽好酸球の浸潤と器質化を伴う壊死組織であったが, 一部にGhost化した腺房様の構造が観察されたことと腫瘤の存在部位から脾臓と考えられ, 若干染色性が異なり不明瞭ではあるが, 腺房上皮と思われる細胞内に大小の封入体が認められた(図3, 挿入図は一部拡大). 図4は封入体の電顕像で, 封入体は高電子密度物質の集合体で, 膜構造はなく, 封入体の最外層には80~100 nmの球形のウイルス様粒子が観察され, 同様粒子は封入体内部の空所にも見られた(barは1 μ m). 挿入図は粒子の小集簇像である(barは500 nm).

【診断】病理組織診断名: 小腸上皮における細胞質内好酸性封入体形成と細菌性腹膜炎, 病名: ボア科ヘビの封入体病 Inclusion body disease in a boid snake.

【考察】ヘビの封入体病(IBD)は, 20年以上前からアメリカを中心に飼育下のボア科ヘビにおいて流行している. 主たる臨床症状は神経症状で, ヘビがStar gazing(虚空を凝視するような仕草)をすることが多いため, 以前, Star gazing diseaseとも呼ばれていた. しかし, 臨床経過はボアとパイソンで若干異なり, ボアでは, 慢性経過をとり, 免疫能の低下による口炎, 穿孔性胃炎や真菌性肺炎などの2次感染によって死亡することが多く, パイソンでは重篤な神経症状を呈し急性経過をとりやすい. 本例の病理所見は前者に一致し, IBD罹患経過中に細菌性腹膜炎を伴った穿孔性消化管潰瘍と壊死性脾炎が生じていたものと推察される. 病理所見としては, 疾患名ともなった細胞質内好酸性封入体が特徴で, 内臓諸臓器の上皮細胞(脾臓, 肝臓, 腎臓, 気管支, 腸), 脾臓のマクロファージや中枢神経系の神経細胞等に観察される. IBDの診断は, 唯一封入体の確認によって行われる. IBDは以前から何らかの感染症として捉えられていたが, 最近になって, 1つの疾患として認識されるようになり, C typeのレトロウイルスが原因として考えられている. (宇根有美)

【参考文献】J. Zoo Wildl. Med.25:511-524(1994).